

長谷川敬

書下ろし長編愛欲サスペンス

花形役者殺人事件



際限ない名門役者の情事が...
相手役にすることを餌に、女優をも
にしては捨てる名門の御曹司役者。
の行状に冷たく注がれる二人の瞳!

花形役者殺人事件

昭和六十年十二月二十五日 初版発行

著者 長谷川 敬

発行者 峯島 正行

発行所 有楽出版社

東京都中央区銀座二丁目二
誠佳ビル六階 ☎一〇四
TEL〇三(五六七) 三七八四

発売所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一丁目三十九
TEL〇三(五三五) 四四四一
振替東京一三二六 ☎一〇四
支局 大阪市北区曾根崎二丁目十七
梅田第一ビル内
TEL〇六(三一二) 一五七三

印刷 大日本印刷株式会社
製本 共文堂製本所

乱丁、落丁の場合はお取り替えます。

目次 長谷川敬 欲サスペンス

花形役者殺人事件

長谷川敬

有楽出版社発行・実業之日本社発売

目次*花形役者殺人事件

第一章	門 閥	5
第二章	共演者の死	43
第三章	復讐への序奏	77
第四章	肉体の罠	98
第五章	熱海の夜	124
第六章	華麗なる舞台	143
第七章	千秋楽炎上	181

カバー画／福田隆義

本文插画／若菜 等

装帧／サン・プランニング

第一章 門 関

1

曇空だった。皇居・桜田濠も日没を前にして暗くよどんでいる。

濠とは道路ひとつでへだたる、三宅坂・国立劇場。その裏庭へむけて、七、八人の青年が駆けてゆく。紺色のトレパン姿の彼らは、国立劇場が養成する歌舞伎研修生だ。

砂場に着くなり、シャベルで砂を掘りおこしはじめた。

「いつまで掘ってるんだい、バカヤロ」
背後から怒鳴ったのは、坂東万之助^{ばんとうまんのすけ}だった。

「砂場をそんなに柔らかくするもんだから、いつまでたってもカカトからおりるくせが直らないんだ。誰でもいいから、早く、バケツに水をくんでくるんだ」
荒々しい言葉遣いにはじかれるようにして、数人が楽屋口方向に走った。

万之助は、〈へとんぼ返り〉の講師で、講師陣のなかでも、ひとときわ厳しいといわれていた。やがて六十歳になろうという年齢だが、声に艶があるばかりでなく、身のこなしにかけては、研修生の及ぶところではない。

やがて、バケツの水をゆらせながら、数人が砂場にもどってきた。

「さあ、水をまいて砂をこちに固めちまえ。だいたい、砂場でなんか練習することはないんだ。コンクリートでやりやあいいのさ。そうすりゃ、いやでもツマ先でおりのようになる」

研修生らは、水をまいた砂場を足でふみ固めはじめ

た。私語ひとつなかった。

「バカヤロ、いつまでやってるんだい。言われたからって、カチンカチンにやることはないだろ、時間がなくなるじゃないか」

腕を組み、万之助は苛立たしげに怒鳴った。

「いいかい。とんぼが巧いということは、そのまま立廻りが巧いってことに通じるんだ。立廻りは、なにも鬼ごっこみたいに追っかけっこじゃないんだ。襲いかかった一瞬、絵になってきまるのが大切なんだ」

砂場から離れ、研修生らは一列にならぶ。先頭の一人在小走り、そして全身をバネのようにして宙返りする。着地するなり、よろけ尻をついた。

「お前さんはダメだねえ。早いとこ、職安にいったほうがいいんじゃないかね」

万之助の、きまり文句は、職安に行けという痛烈な一矢だった。

基礎になる、とんぼの演技があつてこそ、立廻りに

花をそえることもできる。井戸屋根から、後返しして、床板にきまる凄まじさが、観客の息をとめるのだ。

片足だけついて両手を後へつく三徳、返り越し、返り立ち、返り込みなど、下廻りの役者にとっての必須課目だ。研修生らは、いわば下廻りの役のために養成されてもいる。

裏庭は、すでに闇につつまこまれ、傍の街路灯が、十二月の寒氣にふるえるように灯っている。とんぼの実習は、万之助の怒声のなかでつづいていた。

「おれは、役者にむいていないのかもしれない」

津久井治は、順番を待ちながら思わずつぶやいた。そのつぶやきが、万之助の耳をとらえた。

「バカ者、二年やそこらで、むくもむかないもあるものかい。なんだって命がけでやらなきゃ、ものになるわけないだろ」

言葉が終らぬうちに、万之助の拳がいきなり彼の頬

をとらえた。

腹は立たなかった。むしろ爽快な仕打ちとして、津久井はうけとめた。自ら選んだ道だ。来春、研修修了までには、なんとしても軀からだに覚えこませようと、唇を噛んだ。

2

「芸能レポーターが、しきりに私たちのことを嗅ぎまわっているけど、大丈夫かしら」

能代美加のしろみは、菊十郎きくじゅうろうの厚い胸に顔をうずめるようにしてささやいた。

「そんなに心配なのかい。だったら、別れてもいいんだぞ」

硬くなった美加の乳頭を指でもてあそびながら菊十郎は応じる。

「イヤよ。絶対に別れない」

美加は、彼の下腹にむけて手をすべらせ、駄々をこ

ねるように肩をくねらせた。

「レポーターなんて、鼻薬をきかせておけば、なんだってこっちの意のままさ」

言い終るなり、菊十郎は含み笑いをもらした。

「いまの笑い、変だわ。なにか企んでるんじゃないの」

彼の胸から顔はずし、美加は探るように彼の視線をとらえる。

坂東菊十郎、三十四歳。父・菊三郎の長男で、いわゆる御曹司と呼ばれる歌舞伎俳優である。山北流家元でもある菊三郎が亡くなれば、やがては襲名する恵まれた立場だった。

歌舞伎の世界は、世襲による門閥制度でなりたっている。名門の御曹司でない限り、主役は与えられない。逆に言えば、坂東家の栄光のうえにあぐらをかいて過せるのだ。

美加が、菊十郎と知りあったのは、テレビドラマで

共演した一年前のことだった。次代を荷負うホープだといわれながら、菊十郎は伸び悩んでいた。そのために、テレビドラマに進出し、人気をたかめようとしていた。

能代美加もまた同様だった。新劇の文芸座に所属していたが、いまひとつ人氣に欠けるものがあつた。菊十郎の誘いにのつたのも、御曹司と親しくしてれば、いつかは商業演劇の舞台で脚光を浴びられるのではないかという計算が働いていた。

「あなたも、来年のお芝居では、徳之助さんを見返してやれるわね」

美加は、菊十郎の熱い下肢に、柔らかな下半身をおしつけ、喘ぐように言った。市川徳之助は、娘役も多いが、二枚目系の立役を本領にしている。菊十郎は目の仇にしていた。

「徳之助の名前なんかださないでくれよ。反吐^{へど}がでる」

荒々しく菊十郎は、美加の軀におおい重なり、その足を割ってくる。

「きつと、大成功するわ。あたしだって、劇団の連中を見返してやるいいチャンスだもの」

美加の下半身は、菊十郎の胸によって押しまげられた。

ほどよい暖房だった。ベッドの上で、二人は全裸だった。フロアスタンドの照明が、若々しい二人の肉体を浮かびあがらせていた。

「十日間も、放りっぱなしなんてヒドイわ」

淫らに両足をひろげ、美加は訴えるように彼を見上げた。

「浮氣したんじゃないだろうね」

「疑うなら、調べたらいいじゃないの」
けしかける美加だった。

「よし、検査してやる」

菊十郎は、美加の足首を掴み、さらに大きくひろげ

た。そして、軀をずらしながら、下腹に顔をおしつける。

舌がすべりこんできた。熱い舌だった。全身がしびれてくる。器用な舌が、尖った部分をはじく。そのたびに、美加は失神しかける。

「浮気してたら……こんなに、こんなに燃えないわ」
菊十郎の首に手をのばし、軀をよじる美加の言葉は声にならなかった。

それからの二人は、飢えた獣のように互の肉体をむさぼりあった。美加もまた、彼のものを口に含んだ。

「これは、あたしの守り神なんだわ」

彼がもらす喘ぎ声が、さらに昂奮させてくる。

絶頂に達したのち、二人は抱きあったまま、その余韻をたのしんでいた。

「ごめんなさい」

美加は、ベッドからそっと離れた。

「御曹司に風邪をひかせたら、一大事」

微笑みかけ、美加は裸のままバスルームに走った。

熱い湯を洗面器にあふれさせ、美加はベッドルームに戻った。タオルで、菊十郎の全身をていねいに拭いた。

「でも、可哀そうね」

菊十郎の腿を拭いながら、美加は含み笑いをもらした。

「可哀そうって、なにがだい」

「待たせてるんでしょ、車のなかで」

「なんだ、あの男のことか」

「なんとか言ったわね、あの研修生の名前」

「津久井だ」

「いいのかしら、待たせておいても」

「かまやしないよ。運転させてやって、小遣金をやってんだから。それにさ、これぐらいのことが耐えられなくちゃ、下廻りの役者なんてつとまりやあしない」

菊十郎は大の字に寝そべったまま、美加の腕をとり

引き寄せくてる。

「来年、研修が終わったら、お父様のところに弟子入りするんでしょ」

「妙に、彼のことを気にするんだね」

「気になんかしてやしないけど」

薄い毛布をかけると、美加はふたたび彼のもとにもぐりこんだ。

「どういうつもりで、研修生になったのか、不思議なのよ。本公演では、いくら勉強したからって、カラミの捕方以上の役にはつけないんだもの」

「そんなこと、知らないよ。なに、彼らだって結構、あれで満足してるのさ。歌舞伎はつぶれやしないし、お手当だってそれなりにあるしね」

「あたしたちのこと、彼がばらしたりしないでしょうねえ」

「バカだな。そんなことしてみろよ、たちまちこの世界からはじきとばされるじゃないか」

「そうね。でも、チョッピリ可哀そう」

「それほど気の毒に思うなら、抱いてやったらどうだい」

菊十郎の手が、美加の腿にすべりこんできた。

「ぎゅっと、ここで、あの男のものを可愛がってやるんだね」

と言ひ、菊十郎は指を割りこませてきた。

「これは……あなただけのものだわ」

足をからませ、美加は眼を閉じた。そして、巧みな彼の指の動きのなかで、幸福感を味わっていた。

菊十郎は、来年五月に予定されている明治座での商業演劇で、主役を演じることが決定していた。脚本はまだ完成していないが、シェイクスピアの作品を翻案したものである。その舞台に、美加も共演者の地位が約束されていた。文芸座の仲間たちは、菊十郎に軀を売って、役をつけてもらったのだなどと噂しているのを美加もきいていた。



「勝てば官軍なのよ」

胸の裡で、美加は仲間にも吐きすてた。

3

津久井治は、菊十郎をマンションに送りとどけてから、二時間以上にもなることに苛立ちはじめていた。

地下駐車場の車のなかで、他愛ないラジオ番組に時間をつぶしていたが、それも飽きた。

歌舞伎研修生は、毎月三万円与えられている。その三万円は、アパートの家賃で消えてしまい、アルバイトしなければ生計が成り立たない。銀座のクラブでウエーターをしたり、ホストをしたり、研修生九人のうち半数は水商売で収入を得ている。

治は、大学を中退して、国立劇場が募集している研修生に応じた。福島市に住む両親の反対を押しきったことだった。それだけに、親に生活費を頼るわけにいかない立場なのだ。

半年ほど前、坂東菊十郎が運転手のアルバイトを探していると伝えきき、すぐに彼は応じることにした。

銀座のクラブなどに遊びに行った折などに、菊十郎の外車を運転する役割りだった。ゴルフ場へ送迎することもあった。三万から四万という収入が、それによって確保できた。惨めさを味わうこともなかった。菊十郎の付人という地位が将来得られるかもしれないという期待もあった。

歌舞伎には全くの素人だった。テレビでの舞台中継をみた程度だった。しかし、大学を卒業後、サラリーマンで定年まで過す人生には疑問を抱いていた。といって、商売にむいてもいない。軀を動かすことは好きだった。高校生時代、サッカーに熱中した彼は、ヘッディングが得意だった。バネのある肉体だった。

気紛れに応募した研修生だった。なにも一生を強制されているわけでもない。イヤになれば、また別の仕事につくだけのことだという気楽さが、これまでの激

しい稽古に耐えさせてきた。

「それにしても、なんて役廻りだ」

運転席で寝転がる治は、思わず舌打ちするのだった。まさか、菊十郎を愛人宅に送迎する役まで与えられるとは思ひもなかったことだ。

「いい気なもんだな、御曹司ってのは」

つい愚痴をもらしたとき、同期の三輪は、

「莫迦らしいと感じたら、一時間だっていられないのが、この世界さ」

と、彼はくったくのない表情で応じた。

「御曹司には、御曹司の道がある。しかしね、歌舞伎を支えているのは我々なんだぜ。名題^{なだい}だけでは、芝居にならない。おれは誇りを忘れたことはない」

三輪に言われるまでもなく、治も、一年半の稽古を重ねてきて、次第に舞台に立つ喜びをわかせていた。義太夫、長唄、下座音楽^{げざ}の習得は、充実感があつた。「いったい、いつまでイチャついてればいいんだ」

クラクションを存分に鳴らしつづけてやりたい思いにかられる治だった。

「相手の女も、どうなってんだ。菊十郎サマを利用してってわけだろうが、新劇がこれでは泣くつてもものさな」

終りの部分は、習い覚えた五代目辰蔵^{たつぞう}の声色を真似てみるのだった。

さんざん待ちくたびれたあげく、菊十郎が地下駐車場に姿をあらわしたのは、午前一時近くだった。彼は、待たせたなという一言もなく座席に乗りこんできた。さすがに、治も腹立ち、いきなり急発進させた。

「おい、危いじゃないか」

バックミラーにうつる彼はのけぞりながら両手で軀を支えた。

「乱暴な運転で、憂^{うれ}さを晴らそうっていうのかい。待つのがイヤなら、いくらだって替りの男はいるんだよ」

ねばっこの声音で、そうつけ加えた。

車はすぐに参宮橋にでた。右折すると、左手に代々木公園がひろがる。

菊十郎の自宅は、南青山の根津美術館に近いマンションにある。深夜ならば、せいぜい二十数分で着くという距離だ。

原宿から表参道にでたとき、治は不審な車が尾行しているのに気付いた。スピードをゆるめると、後続車も同じように距離を保ちだす。

スピードを速めたり、遅くしたりして、治は様子をつかがう。菊十郎は機嫌良く鼻歌をうたっていたが、速度の変化で、治と同様に尾行車に気付いたらしい。「うしろの車は、例によってゴキブリじゃないのかしら」

芸能レポーターを、ゴキブリと言つてのける菊十郎だった。

「そのようですね」

「ドジだねえ、お前さんは。もたもた運転するから尾行されるんだ」

幼年時代からわがままいっぱいに育ったためか、感情の変化が激しい。

「少し、遠廻りします」

直進するところを、赤信号寸前で青山通りを左折する。

外苑前からさらに右折したときには、すでに尾行車の姿は消えていた。

青山通りから西麻布に抜ける一劃は、高級住宅街である。戸数は多くないが、それだけに豪華なマンションが点在している。大使館員や外人商社マンが多く住んでいるようだった。

流行の煉瓦タイル張りの四階マンション。南青山ハウスに菊十郎を送りとどけたのち、治は車庫で、車の汚れをとった。どれほど遅くならうが、その日のうち

に手入れをしておかなければ、菊十郎の機嫌は悪くなるのだった。

ようやく一日が終り、通りにでたのは午前二時を過ぎていた。厳しい寒気だった。

軀からだを暖めるために、治は走りだした。車の走行量も、さすがに少い。吐く息が白くなった。

「考えちゃあいけない。なにも考えないことだ」

走りながら、自分に言いきかせる。

研修生仲間の三輪ではないが、莫迦ばからしいと感じたら、とうてい務まるアルバイトではなかった。

浮気遊びの御曹司のために、午前二時になるまでつきあわされる虚しさや屈辱を、ひとときも胸にたたみこんではならないのだ。

路地ともいえる道を抜けると、そこに古い木造アパートが建っている。南青山ハウスから歩いて二十分のところだ。

周辺の建物とは全く不似合な粗末なアパートだっ

た。菊十郎のアルバイトを引受けたとき、治はこのアパートに移った。治が探したわけではなく、アルバイトの前任者が借りていた一室をあてがわれたのだった。

木戸をあけ、二階への階段をそっと上った。すると、そこに一人の男が腕組みし立っていた。酔っていて、部屋の鍵を探しあぐねているのだろうと思った。

男の顔を見ずに、自室にむかいかけた。

「おつかれさん」

不意に男は言った。

「御曹司のお供もたいへんだねえ」

ねざらう男の声だった。

治は立止り、男の顔を振返った。階段灯の下で、それが芸能レポーターの桜木であることがすぐにわかった。テレビで見覚えのある角張った顎が印象的だった。

「ちょっと、話をきかせてくれないか」